

新刊紹介

新刊紹介

1. 古代宮都と地方官衙の造営

小笠原好彦著

2. 大日本古記録 陽明文庫本 勘例 下

東京大学史料編纂所編纂

3. アレクサンドロス大王の歴史

ディオドロス著 森谷公俊訳注

「古代宮都と地方官衙の造営」

小笠原好彦著

吉川弘文館 二〇三・一二刊
A5 四〇〇頁 一〇〇〇円

著者は、考古学の立場で、古墳時代から奈良・平安時代を対象に、宮都や寺院の造営・地方豪族・地方官衙などの研究を進めきており、この分野の著作も多数ある。本書は二部構成で、第一部に古代宮都の性格や造営に関する論考十一編（うち新稿四編）、第二部に地方官衙に関する論考三編を収める。

第一部は、飛鳥時代の王宮や、難波宮と藤原京・平城京の関係などを扱つたもの。特徴的なのは、複都制を大きな視野でとらえ、難波宮だけでなく恭仁京・紫香楽宮・保良宮なども、分量を割いて基礎的な検討をしている点であろう。

とくに興味深い論点は、飛鳥宮と酒船石遺跡・亀形石像物を検討し、これを朝鮮式山城と同一構造の王宮と評価する点（一・二章）。聖武朝難波宮に特徴的な内裏

前殿について、それ以前にない形式で、平城宮東方官衙一期（奈良時代前半）に類似構造を持つ官衙があること、さらにいくつかの国衙・郡衙遺跡の建物配置に共通性を指摘し、これが奈良時代前半に導入された形式で、叙位等の儀式に列立する官人のためのテント状の建物であったと推定する点などである（三・六章）。

これに続く、紫香楽宮の構造（八章）や、保良宮とその周辺地域の検討（五・九章）、および瀬田川河畔を中心とした木材生産と運搬の検討（一〇・一一章）などを主題とする諸論考からは、主に聖武朝における近江地域が様々な視角から明らかにされる。保

良宮の擬定地については、従来説で可能性の高いのは石山国分遺跡であるが、氏は、これを保良宮関連の官衙とし、本体となる淳仁天皇・孝謙上皇の御在所は、南方にある田辺台地と推定、さらに恭仁京の内裏を参考とした復元案を示す。

第一部の大きな論旨は明快で、古代の複都制を明らかにする目的から、それぞれの官都造営の契機・役割、それを物質面で支える地域の構造などについての理解を提示

している。

第一部は、地方官衙を題材とする。各地の都衙遺構を、建物の配置や役割などの点から類型化して総論的に整理した論考（一章）、および官営工房に関するとみられる建物に着目した個別的研究（二・三章）からなる。

全体としては、各論考とも、これまでの考古学的成果を丁寧にまとめたうえで自らの解釈が示されている。文献史学の立場からすると、説明のための遺構図がもう少し豊富であれば分かり易いと思う箇所があつたほか、参照される研究や、史料を用いた説明に、やや物足りなさを感じたが、著者の大きな構想には影響ないことは言うまで証が迫られているようと思われる。

（新井重行）

東京大学史料編纂所編纂

『大日本古記録

陽明文庫本 勘例 下

岩波書店 A5 三六四頁 一七〇〇〇円

二〇一三・三刊

本冊は、二〇一八年に刊行された上巻に続き、陽明文庫が所蔵する七巻の先例集「勘例」（本冊解題によれば古い名称は「類聚雜例」）。すると表題も「類聚雜例」がより適切となるが、このことは上巻刊行後に判明したらしくやむを得まい）を活字翻刻化したものである。上巻が儀式・年中行事に関する四巻分を収めたのに対し、こちらは除目に關する三巻分、さらに附載として解題、上巻の正誤表、人名・地名・引用書目の索引を収載する（編年索引も欲しかった）。

「勘例」は、九〇年代頃から研究者の間で用いられてきた史料であり、現在は史料

編纂所・歴彩館で原本の高精細画像データの閲覧が可能である。しかし本冊は單に原本を見るより、格段にその利便性が高められている。特に評価すべきは、陽明文庫内に眠る「勘例」の断簡を探し当て接続し直

五六(一六五)

し、古態の復元を行つたことである。こうした作業はいわゆる一般利用者には難しく、史料・研究環境に恵まれた編纂所の本領を示すものといえよう。また、解題で示された「勘例」の書写・成立論は、単なる史料紹介に留まらず、中世公家のアーカイブ形成を考えるうえで多くの示唆を読者に与えてくれる。戦国期の九条家では、勘例の類を「勘草」と呼び管理していたようであるが（宮内庁書陵部所蔵九条本九一六一六「諒闇中諸雜例略々」）、近衛家文庫の内裏はどうほどのものであつたか興味は尽きない。

本冊の魅力は、何といっても除目・任官に関する豊富なデータであり、この場で例示する紙数はないが、ここにしかない貴重な情報も数多い。さらに翻刻にあつては、できる限り人名・年月日の誤りを正す形で校訂がなされており、読者にとっては大変ありがたい。同時に、「勘例」が元々誤りを相当程度に含んでいることにも改めて気づかされる（本冊解題も参照）。この点は、我々が「勘例」の記載を研究に利用する際、嚴重に注意を払わねばならない。とはいっても評価すべきは、陽明文庫内に眠る「勘例」の断簡を探し当て接続し直す意圖なく無二の価値を有する史料であり、

古代史・中世史研究者は座右に備えるのを
お勧めする。今後は「勘例」紙背文書の翻
刻にも期待したいところである。

最後に、紹介者が見て校訂の不備と思わ
れた箇所を列挙しておく（あまりに些細な点
は割愛）。①一二四頁：「十八日、同除目入
眼」の行：八には「七カ」と付すべきか。
②六八頁：勘申日の「四月十三日」に（曆
仁元年カ）と付すべきか（中原節季の官職や
左大弁卿（藤原忠高ならん）の任官時期など
から年次を絞り込める）。③七二頁：平清邦
の項の割注「重衡朝臣」：重衡には「清
盛」を付すべき。④一〇〇頁：前頁「源當
時」に付くべき傍書「左衛門督三人不審、
任本」の位置が不適（ちょうど頁跨ぎにな
ったため）。⑤一〇四頁：藤原通俊の割注
：「經実」の下に句点がない。⑥一四四
頁：藤原朝方の項「皇太后宮權大夫」：正
確を期すなら大に「太」を付すが（古代か
ら混用される單語ではある）。⑦一九四頁：
「不歷直諭助教直任博士例」への籠頭「文
章博士」は「明經博士」の誤り。⑧二〇六
頁：「明經博士兼勘解由次官例」の割注：
「十市有象」は正確には市と有の間に「部

脱力」を付す（ただし平安期の部姓はあえて
字を落として表記することも多かつた。部姓を
嫌つたため）。
(鈴木蒼)

デイオドロス著

森谷公俊訳注

アレクサンドロス大王の歴史

河出書房新社 二〇二三・四刊
四六巻 四四八頁 六七〇〇円

本書は、デイオドロス著「アレクサンド
ロス大王の歴史」の全訳および注釈書であ
る。と、とりあえず書いてはみたものの、
実はデイオドロスに「アレクサンドロス大
王の歴史」なる題名の著作はない。

著者のデイオドロスは、紀元前一世紀の
人、シチリア島出身の歴史家である。シチ
リアは今でこそイタリア共和国最南端の州
であるが、古代にはむしろ、多くのギリシ
ア人入植者が居住する、ギリシア文化圏の一
部であった。デイオドロスもまた、ギリ
シア語で執筆活動をおこなっており、この
点ではギリシア人と呼ぶことができよう。

デイオドロスが活躍した時代は、ローマ

帝国の拡大期と重なる。古代におけるグ
ローバル化の波が押し寄せるなか、当時の
歴史家の関心は、古今東西の出来事を一書
にまとめあげる、「世界史（ユニバーサル・
ヒストリー）」の執筆へとむかつた。デイオ
ドロス作の「歴史叢書（ビブリオテーク）・
ヒストリイケ」も、通常そのような「世界
史」に分類される。原題の「ビブリオテー
ケー」は「図書館」を意味し、全四〇巻と
いう分量も、その名に恥じない。われわれ
はまるで書架から一冊を選び出すかのよう
に、デイオドロスの歴史「図書館」からお
目当ての巻を手に取ってきたのである。

本書「アレクサンドロス大王の歴史」は、
このデイオドロス著「歴史叢書」の第一七
巻に、訳者の森谷氏が便宜的につけた呼び
名である。この一七巻は、紀元前四世紀後
半に偉い世界帝国を築いた英雄、アレクサ
ンドロス三世の伝記ともなっている。先ほ
どデイオドロスの歴史書は「世界史」であ
ると紹介した。「世界史」であるならば、
本来は場所も登場人物もめまぐるしく入れ
替わるはずである。ちょうど、高校世界史

の教科書がそうであるように。実際ディオドロスも、ほかの諸巻ではこの流儀にならっており、「一方その頃、別の場所では」といった具合の場面転換が多い。これ

にたいして、一人の人物に密着する第二七巻は、「歴史叢書」全体を見わたしても異色の作りとなつており、ここに森谷氏は、「世界史」の結節点を見出すのである。

本書の訳者である森谷公俊氏は、長年にわたつてわが国のアレクサンドロス大王研究を牽引してきた。これまでアレクサンドロスにかんする多くの論文や著作を発表し

てきたが、なかには新書や文庫本など、広く読書界に資する業績も多い。しかし本書は値段設定からもわかるように、一般読者はむけというよりは、ひたすらにアレクサン

ドロス研究とむきあつた成果と言えよう。とくに、本文にたいして三倍近くもの圧倒的な分量で付された注釈には、訳者の鬼気迫る思いすら感じられる。しかば本書は

単なる訳書ではなく、訳者の研究成果の集成として、アレクサンドロス研究はもとより、今後のディオドロス研究にとつても大きな礎となるであろう。

(阿部拓児)

訂正
史学雑誌第百三十二編第四号
平井上総「書評」牧原成征著「日本近世の秩序形成——村落・都市・身分——」の書誌情報が欠けておりました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

(正) (東京大学出版会 一〇二二・九
刊 A5 四〇二頁 七八〇〇
円)

史学雑誌第百三十二編第十号

表紙に次のような誤りがありました。訂正させていただくとともに謹んでお詫び申し上げます。

- (誤) 昭和戦時期における戦争指導体制
の構築と軍事補強体制の交錯
(正) 昭和戦時期における戦争指導体制
の構築と軍事補強体制の交錯